

特集

# 鵜

社会を映し出す鳥

鳥に何を見るのか 卯田宗平

恵みをもたらす鵜 亀田佳代子

神聖性をもつ鵜 市田雅崇

描かれた鵜 水野裕史

害鳥としての鵜 須藤明子







# ウクライナのヒバリ

うえだ  
けいすけ  
上田 恵介

今の季節、朝の散歩で畑の中を通る道を歩いてみると、上空からヒバリのさえずりが聞こえてくる。春の陽を浴びながら、さえずりに耳を澄まし、今日も一日、いい日だったらいいなと思う。

だがヒバリのさえずりを聞いていると、どうしてもしまぬ戦火の真只中にあるウクライナのことや頭をよぎる。ウクライナは国土の大半が平原で、小麦の一大産地である。今、その平原を戦車や装甲車が走り回り、ミサイルや砲弾が飛び交っている。報道には出てこないが、ウクライナの戦場にもヒバリがたくさん住んでいるはずである。ヒバリは広くユーラシア大陸全域に生息する鳥で、畑や草地の広がる平地を好む鳥だからである。

洋の東西を問わず、ヒバリはのどかな農村風景の象徴である。私が子供の頃、アメリカからの輸入小

麦が入ってくる前は、日本も全国各地に麦畑がいっぱいあった。麦の株の間にはヒバリが巣をつくり、上空ではヒバリが高らかにさえずっていた。しかし今では麦畑もすっかり減り、ヒバリも少なくなってしまった。

高い空に舞い上がってさえずるヒバリの姿は、古来、人々の心を動かすものであった。小鳥の飼育が盛んだった江戸時代、武士たちはヒバリの声を好んだという。舞い上がって、朗々とさえずるその声の力強さが好まれたのだろう。そのため、籠の中で飛び上がってさえずるように、高さ二メートルもあるヒバリ専用の籠がつくられていたそうである。

ヒバリはずっと昔から、人々の身近にいた。「うらうらに 照れる春日に ひばりあがり 情悲し も ひとりしおもへば」と、大伴家持が詠んだ有

名な歌が万葉集にある。春になったのになんとなく心が晴れない思いを抱えていた家持の心に、空高く、柔しげにさえずるヒバリの声は深く響いたのだろう。こうした人間の側の思いとは裏腹に、ヒバリにとつてさえずりは重要な意味を持っている。じつはさえずっているのはオスだけである。オスは春早くからなわばりを確保して、メスと番いになろうとしてさえずる。複雑で長い声が、何回も、何回も繰り返され、それが時には10分以上も続く。ヒバリのオスは配偶者を獲得しようとして必死なのだ。

ウクライナには春になるとヒバリの形をしたパンを焼く風習がある。家庭で焼かれた「雲雀パン」は子供たちに配られたり、春の訪れを祝って庭の木に吊るしたりされる。のどかなウクライナの農村風景である。そのヒバリのさえずりが、砲弾の炸裂音にかき消されようとしている。

ヒバリよさえずれ。家々の庭先に雲雀パンが吊るされ、子供たちが笑い声を上げて走り回る平和な光景が、戻ってくる日のために。

## 目次

- 1 エッセイ 千字文  
ウクライナのヒバリ  
上田 恵介

### 特集

#### 鶉——社会を映し出す鳥

- 2 鳥に何を見るのか  
卯田 宗平
- 4 恵みをもたらす鶉  
亀田 佳代子
- 5 神聖性をもつ鶉  
市田 雅崇
- 7 描かれた鶉  
——日本の鶉飼美術  
水野 裕史
- 8 害鳥としての鶉  
須藤 明子
- 
- 10 みんぱく回遊  
展示場探鳥メモ  
吉岡 乾
- 12 みんぱくインフォメーション
- 14 ○○してみました世界のフィールド  
ハナン山頂でばんざい  
——タンザニアで山登り  
和田 正平
- 16 世界のバスケットリー×バスケットリーの世界  
籠で水を汲む  
竹田 晋也
- 18 シネ倶楽部 M  
中国の「周縁」を生きる  
——「三姉妹——雲南の子」  
奈良 雅史
- 20 ことばの迷い道  
ギリシア文字を用いた  
アフリカの2つの言語  
宮川 創
- 21 編集後記・次号の予告

### 表紙

鶉飼い漁が終了し、カワウに餌として小魚を与えているところ  
(撮影：卯田宗平、中国江西省鄱陽湖、2006年)

### プロフィール

1950年大阪府枚方市生まれ。公益財団法人日本野鳥の会会長。2016年3月に立教大学理学部教授を退職し、立教大学名誉教授。大阪府立大学で昆虫学を専攻、大阪市立大学でセッカの一夫多妻制の研究で理学博士号取得。「一夫一妻の神話」(蒼樹書房、1987年)、「鳥はなぜ集まる？」(東京化学同人、1990年)など、鳥の行動生態学の専門書を多数出し、日本動物行動学会日高賞、山階芳彦賞受賞。埼玉県在住。



# 鵜——社会を映し出す鳥

カツオドリ目科ウ属に分類されるカワウやウミウ。人びとは過去よりこれら鵜と深くかかわりながら暮らしてきた。ときには神聖なものとして、恵みをもたらす鳥として、魚を捕る手段として、歌材や句材、絵の題材として利用してきた。一方、最近では淡水魚を大量に捕食し、糞尿で木々を枯らす害鳥とされ、駆除されることもある。本特集では、鵜がもつさまざまな側面に注目しながら、人間社会における鳥の存在意義を考えてみたい。



船の止まり木に20羽ほどのカワウを乗せて出漁する漁師たち(中国、山東省、2006年)

## 鳥に何を見るのか

卯田 宗平 民博人類文明誌研究部

川や池、湖のほとりを歩いていると、翼を大きく広げた黒い鳥を見ることがある。カワウである。鋭い嘴をもち、水に潜ればどんだん魚を捕食する。しかも水中の魚を水面までくわえあげ、これを見よといわんばかりに「鵜呑み」をする。現在、カワウは淡水魚を獲りすぎるとして、湖や河川の漁師たちから嫌われている。

ただ、カワウやその近縁種であるウミウは過去よりずっと嫌われてきたわけではない。本特集では、鵜がもつさまざまな側面に注目することで、近年総じて評判がよくない鵜を見直すとともに、現代社会における鳥の多面的な存在価値について考えてみたい。

### 生きる術から精神世界まで

鵜とのかかわりで一番に思い付くのは鵜飼であろう。現在、鵜飼は日本と中国で見ることができ。かつてはヨーロッパでも王侯貴族のスポーツや娯楽としておこなわれていた。

二〇〇〇年以上の歴史をもつ中国の鵜飼では、漁師たちが繁殖させたカワウを利用して。一方、一五〇〇年以上の歴史がある日本の鵜飼では、

できない部位のかたまりである。雲南省大理市では、カワウの卵に頭痛薬の効用があるという。住民たちは鵜飼漁師から未孵化卵を購入し、卵焼きにして食べる。わたしも食べたが鶏卵より薄味であった。

このほか、都市の象徴になった鵜もいる。イギリスの海商都市リバプールにはライバーバードというシンボルの鳥がいる。これは鵜だという。対外貿易で栄えたこの地では、船乗りの安全な帰港を願う人びとが、毎日ねぐらに戻る鵜に希望を託した。家族や恋人を想う気持ちや投影されている。ほかにも世界各地には物語や神話、絵画、慣用句などで鵜にかかわる言及や描写がある。

現在、世界中には一万種ほどの鳥がいる。しかし、ウミウやカワウのように生業の手段から薬効利用、霊的な力の利用にいたるまで多様な役割を担う鳥はめずらしい。逆にいえば、わたしたちはむかしから鵜の行動や生態を深く観察し、地域社会の文脈に応じた解釈や利用をしてきた。身近な鳥を考えることは、それにさまざまな期待を寄せてきたわたしたち人間を考えることにもつながる。

### 鵜に期待を寄せる

鵜は民間療法でも利用される。中国明代の本草学研究書『本草綱目』には、カワウの骨を焼いて水で服用すると喉に刺さった魚の骨がとれるとされ、糞尿を焼いて研ぎ、服用すると断酒できるとしてされている。浙江省台州市では、カワウのペリットに風邪薬や胃腸薬の効用があるという。ペリットとは魚食鳥が吐き出す球状のもので、消化



宇治川の鵜飼において孵化したウミウの雛。羽毛に覆われておらず、目も開いていない(筆者作画、2014年)

過去より野生の個体を捕獲して利用してきた。京都府の宇治川鵜飼では二〇一四年からウミウの人工繁殖を始めたが、これはめずらしいことである。このような生殖介入の有無をめぐる両国の相違は、漁場の環境や漁法の規模などの違いが生み出した結果である。鵜とのかかわりは、

もちろん鵜飼以外にもある。『日本書紀』によると、豊玉姫が出産するとき、海辺に建てた産殿の屋根に鵜の羽根を葺いたという。これは鵜の羽根が安産に結び付くという俗信に基づく。事実、ウミウは海鳥のなかでも一シーズンの産卵数が多い方であり、繁殖可能な期間も長い。予測不可能な育雛期の条件に対応するためである。この俗信は鵜の繁殖生態を踏まえたものかもしれない。

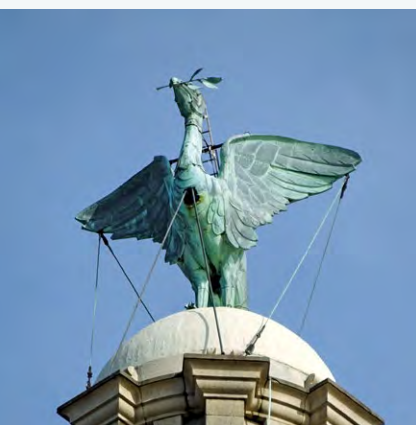
さらに、鵜は神意を伝える役割も担う。本特集でも注目しているが、石川県気多大社の鵜祭では、渡り鳥のウミウを神前に捧げ放ち、その動きから翌年の豊凶を占う。渡り鳥は、この世と常世を往復する霊的な存在だとする考えがある。気多大社では鵜の霊的な力を借り、未来のなりゆきを見定めている。ほかに、日本には鵜の供養塔や供養塚もある。



給餌のとき、目が開いた雛に人間を確実に見させる。すると成長後も人間を恐れなくなる(中国、山東省、2008年)



カワウが吐きだしたペリット。風邪薬になるという(中国、浙江省、2008年)



港の近くに建つロイヤル・リヴァー・ビルディング。塔の頂上にはライバーバードの彫像がある(イギリス、リバプール、2019年)



# 恵みをもたらす鵜

日本には四種の鵜が生息するが、そのなかでも比較的数量の多いカワウとウミウは、日本人にとって身近な鳥である。これらの鵜と人間とは、むかしからさまざまななかかわりをもってきた。ここでは、生き物としての鵜が、自然のなかでどのような役割を果たし、人びとにどのような恵みを与えてきたのかを紹介したい。

## 自然のなかでの役割

自然界での鳥の機能として特徴的なのは、「モノを運ぶ」という役割である。空を飛び自由に移動する能力をもつことから、鳥はさまざまな「モノ」を運ぶことができる。植物の種や花粉を運ぶことをご存じの方もあろう。では、鵜は何を運んでいるのかというと、生物にとって欠かせない元素である。

鵜のような水鳥は、水中の魚介類を食物とし、沿岸部や淡水域で生活する。しかし、繁殖はかならず陸上でおこなう。しかも、多くの鳥が一カ所に集まり、集団で繁殖する。そこでは、親鳥は水中で取ってきた餌を雛に吐き戻して与え、雛や親鳥は巣の周りに白い液状の「糞」（正確には哺乳類の尿に当たるものも含む）を落とす。この行動によって

亀田 佳代子

滋賀県立琵琶湖博物館副館長



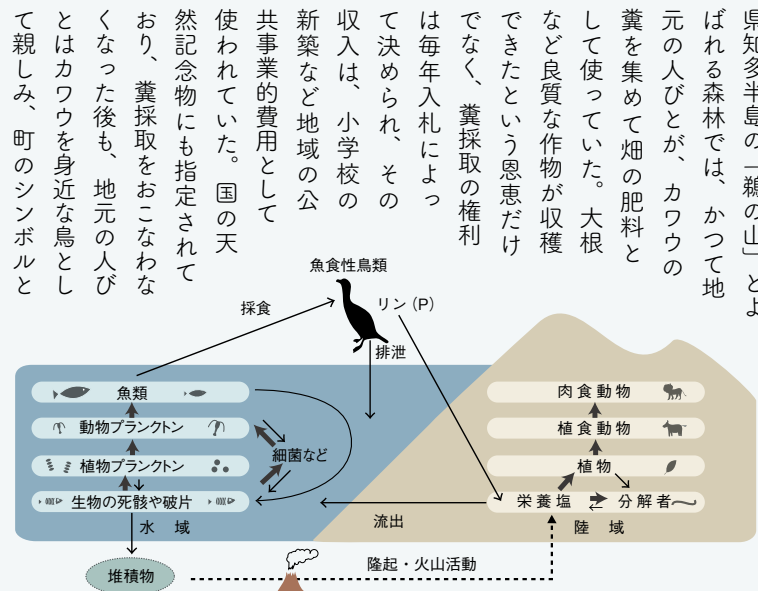
カワウのすみ森では、地面が白い糞で覆われ、外からも白さが目立つ(滋賀県近江八幡市伊崎半島、2005年)

水中の元素は魚介類として水域から取り出され、糞として陸上に供給される。じつはこの働きは、地球上の物質循環において、大変重要な意味をもつ。多くの元素は、水とともに陸上から水中へと流出し、水中の生物に利用される。しかしその一部は、水生生物の呼吸や微生物の働きなどによって大気に移動し、陸上の生物に固定されたり、雨とともに陸上に降り注いだりする。炭素や窒素といった、生物にとって欠かせない元素には、このような循環がある。一方、これらの元素に次いで、生物にとって重要な元素にリンがある。リンは常温で気体にならないため、大気を介した陸上への循環経路がない。水底に堆積したものが、隆起や火山活動によって陸上へと戻る以外、短期的な循環経路がないのである。しかし水鳥がいれば、水中の魚を食べ陸上に糞を落とすことで、水域から陸域へ

とリンが運ばれる。水鳥を介したリン循環経路が形成されるのである。こうして運ばれた元素は、栄養分の乏しい海洋島などでは、海鳥繁殖地周辺の生態系を豊かにし、さまざまな生物の生息を可能にする。

## 人への恩恵

鳥によって陸上へと運ばれた栄養分は、人間にも恩恵をもたらす。愛知県知多半島の「鵜の山」とよばれる森林では、かつて地の元の人びとが、カワウの糞を集めて畑の肥料として使っていた。大根など良質な作物が収穫できたという恩恵だけでなく、糞採取の権利は毎年入札によって決められ、その収入は、小学校の新築など地域の公共事業的費用として使われていた。国の天然記念物にも指定されており、糞採取をおこなわなくなった後も、地元の人びとはカワウを身近な鳥として親しみ、町のシンボルと



魚食性鳥類によるリンの循環 (筆者作成、出典：滋賀県立琵琶湖博物館編『生命の湖琵琶湖をさぐる』文一総合出版、2011年、p.115)



鵜の山でのかつての鵜糞採取の様子 (提供：美浜町教育委員会、愛知県知多郡美浜町、昭和初期)



糞採取の入札金で建てられたこともある上野間小学校の校章 (愛知県知多郡美浜町)

しても活用している。鵜の糞の肥料としての利用は、もちろん海外でも有名で、ペルーなどではグアナイヒメウという

鵜を代表とした海鳥の糞が、現在でも良質の有機肥料として採取されている。

## 益鳥か？ 害鳥か？

生物としての鵜は、モノを運ぶ働きをとおして自然や人間に恵みをもたらしている。一方で、例えばカワウのように樹上で繁殖する鵜の場合、樹木を枯らし森林を衰退させるため、森の景観に価値を見いだす場所では害鳥となる。鵜の行動は同じでも、鵜と人とのかわりは、両者の利用する場とのかかわりも含め、さまざまに変化するものである。

# 神聖性をもつ鵜

二月一六日早朝四時前、石川県羽咋市一ノ宮の海岸の空に鵜が舞う。能登國一宮気多大社の鵜祭、最後の一幕である。冬の日本海の漆黒の空に放たれた鵜は、能生(新潟県)に飛んでいくとも、諏訪(長野県)に飛んでいくとも伝えられている。

## 神となる鵜

鵜祭は生きたまのままの鵜を神前に供する祭りである。鵜は気多大社の北東三〇キロメートルほど離れた七尾市鵜浦の断崖に飛来してきたウミウ。鵜

市田 雅崇

立教大学特任准教授

浦の小西家が代々捕獲する任に当たってきた。捕らえられた鵜は人格化され、丁寧に扱われる。鵜の形や毛色、動きは来年を占うものとされ、羽をはばたかせたり、食事(寒鮒)をとったりするとかの、一挙一動すべてが敬語であらわされる。一羽の鵜は神意によって「鵜様」として「あがられ」、神の化身となるのだ。鵜様は鵜籠とよばれる籠におさめられ気多大社までおいでになる。鵜浦の鵜捕部とよばれる人たちが「うっとりべー」と発しながら、道のりにし



鵜浦を出立する鵜様と鵜捕部を地元の人が見送る(七尾市鵜浦、2003年)



鶺鴒家にて、鶺鴒に手をあわせる人  
(中能登町良川、2021年)



気多大社本殿にて、神前の鶺鴒様 (撮影:三井孝秀、羽咋市、2019年、提供:気多大社)

# 描かれた鶺鴒 ——日本の鶺鴒美術

水野 裕史

筑波大学助教

古墳時代の埴輪のなかに、首に紐が巻かれた鶺鴒形埴輪がある。これは、古墳時代に鶺鴒がおこなわれていた証拠だとされる。しかし、これ以降、鎌倉時代になるまで鶺鴒を表現した造形品は見られなくなる。鶺鴒の目鷹の目で調べたわけではないが、現存作例が確認できないだけでなく、存在した証拠となる記録すらないのである。以前、わたしは我が国において鶺鴒と対をなす狩猟文化である鷹狩の美術作品について調べたことがある。すると、鶺鴒は平安時代より「大原野」や「交野」などの名所を舞台に、相当数の作品が作られていたことがわかった。鶺鴒とは大きな違いである。なぜ中世まで鶺鴒をモチーフにした美術作品がほとんどないのか。この理由は今のところ不明であり、今後の研究課題としたい。

## 『源氏物語』と鶺鴒

さて中世になると、鶺鴒が絵画作品として描かれるようになる。おそらく、『源氏物語』などの文学と深く結びついたことで、鷹狩の美術と同じよ

て四〇キロメートル以上、道中ゆかりのある場所に立ち寄りながら、三日かけて七尾市、中能登町、羽咋市を徒歩で参籠する。例えば、気多本宮（七尾市）では鶺鴒（気多神）のほか、ヘクラ神、スズヒコ神、タケクラ神という能登の四神を招いて新嘗祭がおこなわれる。また、二日目の宿泊は代々鶺鴒の宿を務めてきた鶺鴒家（中能登町良川）でもてなしを受ける。

こうして気多大社に鶺鴒がおいでになられ、二月一六日早朝、神事が執りおこなわれる。神前にて神職と鶺鴒捕部の問答の後、鶺鴒は神前に放たれる。このとき神前の案の上におかれたろうそくに向かわれる鶺鴒の動きから、翌年の動静がわかるという。太平洋戦争の前年には、鶺鴒が案上のろうそくをくわえて放り投げられたと伝えられている。今でも地元の人たちにとっては年末の大きな関心ごとであり、ろうそくの灯のみの真つ暗で静寂のなか、神職、鶺鴒捕部、参拝者、地元メディアがかたずをのんで鶺鴒の動きを見守る。鶺鴒が案上に飛び乗られるやいなや、神職が鶺鴒を抱きかかえ、鶺鴒は一ノ宮の海岸に放たれるのである。

## 鶺鴒という「伝統」

中世末に書かれた気多大社の縁起に鶺鴒についての記述があり、少なくとも五〇〇年ほど前にはおこなわれていたと思われる、前田利家が鶺鴒の様に注目していたことをうかがわせる文書もある。伝説では、鶺鴒は気多神の化身であるとか、鶺鴒の神である御門主比古神が鶺鴒の姿になって気多神に奉じたものであるとか諸説あるが、いずれにして



一ノ宮の海岸に放たれる鶺鴒様 (撮影:卯田宗平、羽咋市一ノ宮、2018年)

も鶺鴒は神の化身として語られ信仰の対象となってきた。

しかし近年では鶺鴒祭をとりまく状況も変わりつつある。環境の変化から野生のウミウの捕獲が思いどおりにいかない年もあり、昨年は三年ぶりに捕獲された。また二〇〇〇年には、「気多の鶺鴒祭の習俗」として国指定重要無形民俗文化財に登録された。担ってきた人たちも鶺鴒祭を後世に伝えるため、鶺鴒捕部は鶺鴒捕部保存会として、鶺鴒家の宿は鶺鴒道中の宿保存会としてあらたに組織化された。鶺鴒は今後、どこに飛んでいくのだろうか。

ウェブサイトでは  
非掲載にしています。

《源氏物語図屏風》江戸時代(17世紀、幅370.8cm×高さ167.6cm) (撮影:Spike Mafford、シアトル美術館蔵)

ウェブサイトでは  
非掲載にしています。

《源氏物語図屏風》(部分)

Friends of the Seattle Art Museum, in honor of the 75th birthday of Dr. Richard E. Fuller

ウェブサイトでは  
非掲載にしています。

《源氏物語図屏風》(部分)



# 害鳥としての鵜

うに文学世界の舞台となった空間や権威を象徴するものとして、鵜飼がモチーフとして採用されたのである。『源氏物語』三十三帖「藤裏葉」では、六条院行幸の場面にて、池に舟を浮かべ、鵜を使って魚を獲る場面が描かれている。この場面を描いた作例としては、シアトル美術館に所蔵される『源氏物語図屏風』(一七世紀制作)がある。画面左側には、鵜飼の場面が描き出され、巧みに鵜を操り、魚を獲る様子が見てとれる。複雑に入り組む水面の渦の合間に描かれた鵜の描写は、じつに優雅だ。屏風の右を見れば、笹に結われた雉と皿に載せた

魚を献上する二人の人物に気づく。雉は鷹狩で捕らえた獲物で、魚は鵜飼で獲ったものだろう。これらは支配者への服属の証とする贅であった。つまり、鵜飼と鷹狩は、権力と結びついた為政者のための共通の儀礼と見ることが出来る。

## 娯楽としての鵜飼

江戸時代になると鵜飼は宮中儀礼として描かれるだけでなく、武士や庶民の娯楽を描いた風俗画の話題にも採用されるようになる。狩野探幽『鵜飼図屏風』(大倉集古館蔵)には、たくさんの鵜飼

須藤 明子

株式会社イーグレット・オフィス

むせ返るような湿気のなか、生い茂る草木をかきわけ、足音を出さないように急斜面を進む。藪の向こうにいるカワウ三羽を発見。いずれも営巣中の成鳥だ。抱卵中か？ 雛の日齢は？ 繁殖状況を確認して三羽を捕獲対象と判断。鳥の動きを予測して撃つ順番を決めて空気銃を構える。頬に当たった銃床が汗で滑る。やぶ蚊が耳元でブンブンうるさいが、スコープのなかのカワウに集中する。枝や葉に当たると弾がはじかれるので、わずかに姿勢を低くして照準を合わせる。

風が右から吹いている。弾道をイメージして一羽目の脳に狙いを定め、息を吐き切って止め、静かに引き金を絞る。残りの二羽が予測どおり危険を感じて飛び立とうとしたため、邪魔な枝をかわすことができ、それぞれ心臓と脊髄を狙って発砲。三羽は絶命して巣の上に倒れ、わたしは蚊に頬や耳を刺された。射手の動きですべてを察知し、音を出さないように静止していた補助員が発砲時間やカワウの齢など射撃結果を記録した。

管理においても同様で、ある野生動物管理の専門家は「自然科学の理論を受け入れて機能させる社会の構造が整っていない」という。

## カワウと人の共存

被害を受ける人びとにとって、害鳥としてのカワウは、いい方が良いに決まっている。しかし、カワウは豊かな水辺環境の象徴でもあり、力強く美しい大型の水鳥を養える川や湖は素晴らしい。野生動物の代弁者でありたいと考えて獣医になったわたしは、カワウを許容できる数に抑えることで、妥協点を見出すことができると思っています。一定数のカワウを受け入れられる社会の実現のために、今後も力を尽くしたいと考えている。



藪の向こうに発見した3羽のカワウ(矢印先)。脳・心臓・脊髄を撃って捕獲した(滋賀県竹生島、2017年)



木のあいだ越しに見えるカワウを空気銃で狙う(撮影:イーグレット・オフィス、滋賀県竹生島、2018年)

カワウの生息数の変化。上は2007年、下は2020年。カワウが減少して植生が回復している(滋賀県竹生島)



舟が描かれており、その周囲には、鵜飼を觀賞する武士や庶民の舟も見てとれる。貞享五(一六八八)年五月に松尾芭蕉が、長良川の鵜飼見物の句を詠んだように、江戸時代になると鵜飼は、為政者による特権的な儀礼から離れ、庶民たちにも広まっていた。このように鵜飼の美術作品を見比べると、雅な世界から庶民の娯楽にまで展開した鵜飼と人間とのかかわりの変遷を読み解くことができる。こうした変遷は、鷹や鵜、鶺鴒などほかの鳥類とどのように異なるのか。美術史における鵜の研究はまだ始まったばかりである。

## 科学に基づく捕獲の成果と社会

滋賀県では、一九九〇年代から狩猟者団体(ハンター)によるカワウの銃器捕獲がおこなわれていた。しかし、カワウは増加し続け、二〇〇八年には県内生息数が春に四万羽、秋に七万五〇〇〇羽になっていた。その翌年から始まったKSSで

現代中国を、カワウと生きる  
—— 鵜飼い漁師たちの技

コレクション展示

現代中国を、カワウと生きる  
—— 鵜飼い漁師たちの技

会期：2022年6月30日(木)～  
8月2日(火)

場所：本館企画展示場の一部







重要なお知らせ

新型コロナウイルス感染症の状況によっては、催し物の予定を変更・中止する場合があります。事前に本館ホームページでご確認ください。

イベント予約はこちら

みんなくホームページ  
催し物のご案内

<https://www.minpaku.ac.jp/event>



特別展

『Homo loquens』『ジャズと人』  
——「人」の思考を科展する

「トバ」が伝わるメカニズムとその多様性を、言語学、文化人類学、工学、医学、脳科学など50名を超える国内外の研究者が協力して、お魅せします。  
会期 9月1日(木)～11月23日(水・祝)  
会場 特別展示館

■関連イベント

連続講座  
SintaxX 超学校  
みんなくXナレッジキャピタル  
「トバ」のつぎは「シ」シリーズ  
いろいろな角度からみた「トバ」研究を紹介いたします。

第1回  
「トバ」コトバと展示編  
日時 8月9日(火)19時～20時  
講師 菊澤律子(本館教授)

第2回

編 音の工学シンポジウム  
日時 9月2日(金)19時～20時  
講師 吉永司  
(豊橋技術科学大学助教)

第3回

身体の違い「トバ」の  
多様性編  
日時 10月7日(金)19時～20時  
講師 中島武史(兵庫教育大学講師)

第4回

英語学習の脳科学編  
日時 11月4日(金)19時～20時  
講師 尾島司郎(横浜国立大学教授)  
参加形式  
ナレッジキャピタルYouTubアカウン  
トよりオンライン(ライブ配信)で視聴  
※申込不要、参加無料  
※詳細は本館ホームページをご覧ください。  
主催 一般社団法人ナレッジキャピタル  
国立民族学博物館

ワークショップ

みんなく夏休み子どもワークショップ  
「フィールドワークに挑戦！」  
——資料をまもる、博物館のじこ  
博物館の資料をまもり、活用することを考え、体験し、その成果をオリ  
ジナルの報告書としてまとめます。

日時 7月30日(土)  
10時30分～15時40分  
会場 本館第3セミナー室、本館展  
示場、収蔵庫(前室から見学)  
など

講師 末森薫(本館准教授)  
対象 小学4年生～6年生  
定員 12名  
参加費 500円  
【申込期間】  
7月6日(水)から  
※事前申込制(先着順)

巡回展

国立民族学博物館コレクション  
「ピース——つなぐかたちをみせる」  
本館の所蔵資料を中心に、世界にお  
ける多様な素材で作られたピースや  
社会的役割を担ったピースなど、世界  
各地のさまざまなピースを用いた展  
示をおこなうと同時に、石川県能登  
関連の展示もおこないます。

会期 7月30日(土)～9月11日(日)

会期中無休  
会場 石川県七尾美術館  
第1・2・3展示室  
主催 石川県七尾美術館(公益財団  
法人七尾美術財団)  
国立民族学博物館  
公益財団法人千里文化財団

みんなくゼミナール

会場 みんなくインテリジェントホール(講堂)  
※定員200名  
※事前申込制(先着順)、参加無料  
※当日参加受付あり(定員40名)

第523回  
7月16日(土)13時30分～15時(13時開場)

編と人間  
——ウミウ産卵の謎解きから  
講師 卯田宗平(本館 准教授)

【申込期間】  
■一般受付 7月13日(水)まで  
※友の会電話先行受付は終了しました。

第524回  
8月20日(土)13時30分～15時(13時開場)

お問い合わせ  
国立民族学博物館 広報・IR係  
電話 06-6878-8560 (9時～17時、土日祝を除く) FAX 06-6875-0401  
お問い合わせフォーム <https://www.minpaku.ac.jp/information/contactus/form>



友の会

友の会講演会

7月より、会場参加に限り、友の会会員の方は事前予約が不要になりました。当日は会場受付にて会員証をご提示ください。

参加形式  
①本館第5セミナー室(定員96名)  
②オンライン(ライブ配信)  
※会員：無料  
一般：500円(会場参加のみ)

※オンライン聴講ならびに会員以外の方のご参加には事前予約が必要です。ご予約は友の会ホームページ内の受付フォームをご利用ください。

第526回 7月2日(土)13時30分～15時  
アボリジニの「酒祭り」  
講師 平野智佳子(本館 助教)

酒は楽しい娯楽ですが、トラブルの種にもなります。アボリジニ社会では酒が好まれる一方で、「酒は毒」という語りがかかれます。こうした状況下で人びとはどのように酒を調達しているのでしょうか? 本講演では、オーストラリアの中央砂漠で狩猟の知識を絞りながら酒を採るアボリジニの「酒祭り」に迫ります。

受付フォーム  
<https://www.senri-f.or.jp/526tomo/>

第527回 8月6日(土)13時30分～15時  
探検、博物学、強制収容  
——朝枝利男とアメリカ  
講師 丹羽典生(本館 教授)

第二次世界大戦に際して日系アメリカ人が強制収容されてから80年がたちます。探検家・朝枝利男も収容所で過ごした経験をもつひとりでした。本講演では民博のフォー

ム型情報ミュージアムプロジェクトにおいて精査を続けてきた朝枝利男コレクションを取り上げ、朝枝のまなざしをとおしたアメリカでの体験を紹介します。

受付フォーム  
<https://www.senri-f.or.jp/527tomo/>

アーカイブズ動画公開中!

2022年4月2日(土)に開催しました第523回友の会講演会「モンゴルとSDGs」のアーカイブズ動画を公開しました。動画は友の会のホームページよりご視聴いただけます。

話者 山極壽一  
(総合地球環境学研究所 所長)  
小長谷有紀  
(日本学術振興会 監事、本館 客員教員)

動画URL  
<https://www.senri-f.or.jp/523tomo/>

お問い合わせ  
国立民族学博物館友の会 (公益財団法人千里文化財団)  
電話 06-6877-8893 (9時～17時、土日祝を除く) FAX 06-6878-3716  
[https://www.senri-f.or.jp/minpaku\\_associates/](https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/) E-mail [minpakutomo@senri-f.or.jp](mailto:minpakutomo@senri-f.or.jp)



企画展

「海のくらしアート展——モロからみる東南アジアとオセアニア」

東南アジアやオセアニアの島や沿岸部に暮らしてきた人びとの漁具や船具、儀礼具や装飾品にみられる海とのかかわりを、そのアート(美術)性にも注目しつつ紹介します。

会期 9月8日(木)～12月13日(火)  
会場 本館企画展示場



家舟型の儀礼用装飾土器

コレクション展示

「現代中国を、カワウと生きる——鵜飼い漁師たちの技」

鵜を利用して魚を捕る鵜飼。生業として続く中国の鵜飼を、めずらしい鵜飼い船や本館の卯田宗平が撮影した写真、動画とともに紹介します。

会期 8月2日(火)まで  
会場 本館企画展示場の一部



漁が終了し、カワウを止まり木に戻す漁師(江西省鄱陽湖)

刊行物紹介

■池谷和信 著  
『トナカイの大地、クジラの海の民族誌——ツンドラに生きるロシアの先住民チュクチ』  
明石書店 4,180円(税込)



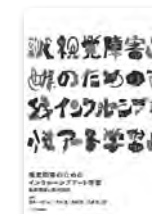
本書は、ホモ・サピエンスの歴史に思いをはせながら、ツンドラの「陸の世界」と「海の世界」を紹介した生活の記録である。筆者は、内陸のトナカイ飼育に従事する村、ベーリング海峡に面する海獣狩猟に従事する村での過酷なフィールドワークをとおして、ツンドラの自然と人とのかかわり方や先住民チュクチとロシア人との共生のあり方を描いている。

■卯田宗平 著  
『鵜と人間——日本と中国、北マケドニアの鵜飼をめぐる鳥類民俗学』  
東京大学出版会 12,650円(税込)



日本と中国、東欧の北マケドニアにおける鵜飼を取りあげた類のない作品。鵜と人間というテーマを突き詰め、より普遍的な視点から、動物利用の論理やドメスティケーションの生起をめぐる新たな解釈を示した。表紙はウミウの孵化の瞬間。

■茂木一司、大内進、多胡宏、広瀬浩二郎 共編  
『視覚障害のためのインクルーシブアート学習——基礎理論と教材開発』



ジアース教育新社 3,520円(税込)  
「視覚障害」を切り口として美術教育の在り方を問い直す。視覚に依存しない鑑賞・制作の可能性について各地の実践事例を紹介する。インクルーシブ教育の未来をアートの視点から展望する意欲的な論考を多数掲載。

■Tetsuo Nishio, Naoko Okamoto, Jun'ichi Oda, Margaret Sironval, Marion Chesnais, Yo Kaji  
"Catalogue du fonds Joseph-Charles Mardrus, traducteur des Mille Nuits et Une Nuit"  
Éditions Abencerage, A. Ghazzi, Paris 40ユーロ

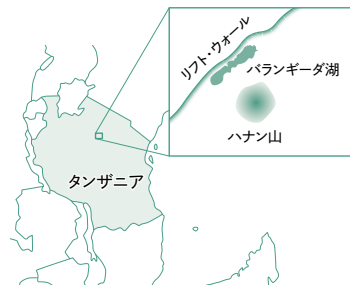


ジョセフ・シャルル・マルドリユスは「千一夜物語」の訳者として有名。手稿など未発表作品が遺族のもとに所有されており15年かけて整理。アラビアンナイト研究だけでなくフランス文学研究に必須の基本文献。



# ハナン山頂でばんざい —タンザニアで山登り

和田 正平  
民博名誉教授



アフリカの自然といえば、多くの人はサバンナ(草原)を想起するだろう。昨年(二〇二二年)文化勲章を受賞した川田順造氏にも『サバンナに生きる』(くもん出版、一九九五年)という著書がある。確かに、アフリカの住人の多くは、サバンナで生活している。わたし



イラクが調査基地の家を建築している  
(撮影:福井勝義、1965年、X0324890)

自身も一九六四年九月、京都大学アフリカ学術調査隊の人類班に参加して、タンザニアのサバンナでフィールド・ワークを開始した。サバンナといっても、今西錦司隊長がわたしに指示した調査地は高い山が壁のように聳えるギティンという村だった。アフリカの山といえ、最高峰がキリマンジャロ(五八九五メートル)で、ついでケニア山(五一九九メートル)、ウガンダにはルエンゾリ山地のマルゲリータ山(五一〇九メートル)等々、高い山々がいくつももある。

## ハナン山麓に基地を作る

登山家であった今西隊長は、アフリカ探検の途上、ハナン山に登り、そのとき麓のギティン村をわたしの調査地と決めたようだ。ハナン山(三四一八メートル)はタンザニア中央部、南北にはしるリフト・ヴァレー(地溝帯)のなかにあ

り、火山活動において形成されたものである。イラク(族)は一九世紀後半のドイッ領時代に、このリフト・ヴァレーに沿って南下し、ハナン山の北面の草原に村を作った。わたしたちはそこに調査基地を作ったのである。最初はテントだったが、長期に渡る調査に備え、家を建てることにした。ハナン山の中腹部は

西洋杉を含む常緑樹林で、建築に最適な立木が多くあったので、政府に伐採許可をもらい、イラクの協力のもとに切妻屋根の家を完成させた。この仕事の大半はイラクの若者たちを動員した福井勝義隊長(当時京大学生)の全面的指示と運搬、共同作業によっておこなわれた。

## 山頂をきわめる

家ができて、調査基地での生活が安定したので、次にハナン山登頂計画を立てた。一九六五年九月二〇日、わたしはイラクの登山ガイドを雇い、基地から登攀を開始した。四時間ほどかけて頂上にたどり着くと、そこは岩石に覆われた不毛地だった。眼下には広大な森林地帯と草原が展開していた。

わたしたちはそんな初めて見る自然に思わず「やった!」と叫んで「ばんざい」をした。また、よく見ると、ハナン山から流出する水流がリフト・ヴァレー(リフト・ヴァレーの崖)にぶつかり、そこに湖が形成されているのが見えた。そのひとつがバランギーダ湖である。乾季の終わりにはほとんど干上がってし

まい、白い塩の結晶が湖面を覆い、塩湖となる。この湖はイラクの人びとにとって重要な塩の供給源となっている。

## 人類の起源

ところで、こうした地形は人類の大移動と深いかわり合いをもっていたように。イラクの南下とは逆に、南アフリ

カから北上してきた人類進化の足跡が発見されたのである。そこはリフト・ヴァレーの一角、ンゴロンゴロ噴火口から三七マイル離れたオールドヴァイ渓谷で、出土したのは「猿人」の頭蓋骨であった。発見者は大英博物館から派遣されたルイス・リーキーで、苦心惨愴の末、二八年目にしてようやく人類の足



ジンジャントロプスの発見場所にて  
(撮影:日野舜也、1964年11月10日、X0322411)

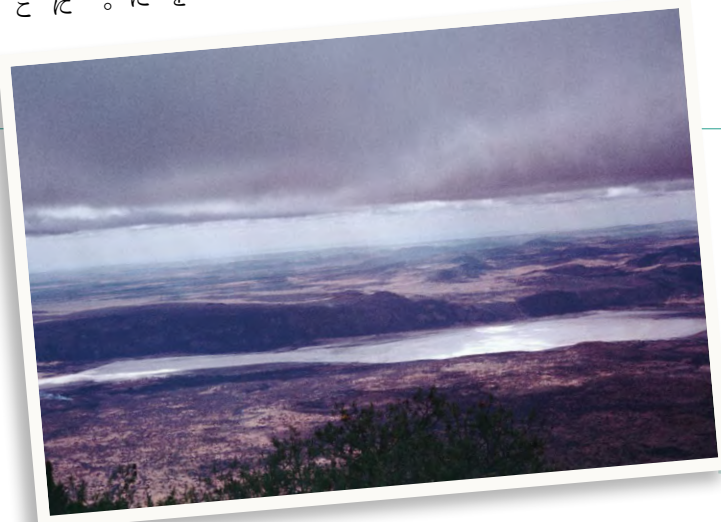


上:雨季のバランギーダ湖を渡る牛群とイラクの牧童たち。背後には屹立(きつりつ)するハナン山が見える  
(撮影:福井勝義、1960年代、X0322950)

下:ハナン山(3418メートル)の頂上にて、「ばんざい」と叫んだ福井勝義(中央)とわたし(左上)、イラクの登山ガイド(右下)と青年たち(1965年9月、X0324110)

Xからはじまる番号は本館の映像・音響資料番号です。

跡にたどりついたのだ。このもつとも古い石器時代の遺跡は一七五万年以上前のものと判定され、彼はこの東アフリカの猿人を「ジンジャントロプス・ポイセイ」と名付けて、学会で発表した。一九六四年一月一〇日、わたしたちは「人類の祖先を探る」という、今西隊長が掲げたテーマにしたがい、エヤシ湖畔の人類基地から合流した藤岡喜愛隊長(当時京大助手)の案内でオールドヴァイ渓谷に向かい、発掘現場を調査した。わたしたちはそこに一泊し、エヤシ湖、ハナン山を含むリフト・ヴァレーが人類進化の足跡を実感できる重要な地形だと了解し合った。翌朝、ハナン基地にもどり、調査旅行の資料を整理して、藤岡隊長は二月二六日、福井隊長は一九六五年一〇月一六日帰国の途についた。そして、ハナン基地で、わたしは今西隊長の掲げた大きな使命を果たすべく、調査を継続することになった。



ハナン山頂からバランギーダ湖とリフト・ウォールをのぞむ(1965年、X0321677)

ハナン山頂から眺めてみました



# 籠で水を汲む

たけだ しんや  
竹田 晋也  
京都大学教授

2020年4月号から始まった本コーナーは、今号で最終回を迎える。植物素材を編み・組みして作った世界各地のバスケットリーを眺めてきたが、最終回では竹で作った、水を汲むための「籠」とおして、人と植物とのかかわりを考えたい。

タイの小説家カムプーン・ブンタヴィーが自身の少年時代を振り返った自伝的小説『東北タイの子』を読むと、一〇〇年前のタイ東北ヤソトン県にタイムスリップできる。第五章「愛し合う二人」で主人公のクーン少年は、カムコーン姉さんが村の若い男に求愛されるのを偶然見てしまう。村はずれの井戸での気まずい場面の後にこんなくだりがある。



ラオスの竹籠屋。タイ東北ヤソトン県のラーオ人はラオスのヴィエンチャンから18世紀に分派した人びとなので、国は違ってもバスケットリーは共通する(ラオス、ヴィエンチャン県、1999年)



ヤンナーの幹に三角の穴をあけ、火をつけて刺激してフタバガキ油を採取する(ラオス、サワンナケート県、1999年)

「カムコーン姉さんは口ごもった。それから井戸の水を汲むつるべを手を延ばしてつかむと、そのつるべ桶を井戸の底まで縄を送りやうって落とした。つるべ桶はマコークの実に似た格好をして竹で編み、水汲み桶と同様、樹液とヤーンの木の脂を混ぜて塗ってあった。つるべ桶が下で横になると水が流れて入った。そこでカムコーン姉さんは大急ぎで手練上げた。二つの桶が水で一杯になると、カムコーン姉さんはクーンにつるべ桶を渡して持たせた」

(カムプーン・ブンタヴィー著、星野龍夫訳『東北タイの子』井村文化事業社、一九八〇年)

ここで「つるべ桶」と「水汲み桶」のふたつのバスケットリーが登場する。現地でグラボムとク(タール)とよばれ、ともに竹で編まれているので木材容器を指す木へんの「桶」と訳すと違和感がある。できれば竹かんむりの「籠」とよびたい。しかしそうすると「籠で水を汲んでいる」ことになるが、それが可能なのは編み上げた後にフタバガキ樹脂を

塗布して水が漏れないようにしているからだ。フタバガキ科の樹脂についても整理をしておこう。樹脂とは「樹木の脂」で、常温で固形の固形樹脂と、精油成分が多く常温で流動性がある含油樹脂に二分される。ここではフタバガキ科の固形樹脂を「ダマール」、含油樹脂を「フタバガキ油」、両者を合わせて「フタバガキ樹脂」とよぶことにする。

## 水汲み籠を作る

竹製の水汲み籠が今でも作られているヤソトン県の製作現場を見てみよう。材料は、二種類の竹ひご(立竹一八



水汲み籠の底面



水汲み籠(ク)  
(タイ、ヤソトン県、1991年)

本と廻し竹四〇本、ともに長さ六〇センチメートル)、木の取っ手、竹の脚、粉末にしたダマール(キリー)、フタバガキ油(ナムンヤーン)である。竹ひごには、材質が緻密で薄く、それでも問題のないポンドムタケ(*Bambusa nuda*)、ライタケ(*Gigantochloa albociliata*)、カオラームタケ(*Schizostachyum pergracile*)の三種がよく使われる。ダマールはフタバガキ科のテン(*Shorea robusta*)やラン(*Shorea siamensis*)の枝から氷柱のように垂れ下がっていて、それを竹竿で落として採取する。フタバガキ油は『東北タイの子』で「ヤーンの木」として記されているヤンナー(*Dipterocarpus alatus*)の幹に三角形の切り込み穴をあけて、そこから採取する。

立竹に太目(幅八ミリメートル)で平たい竹ひごを使い、まずは底部から編み始める。目をずらしながら網代編みにし、そののち竹ひごを立ち上げる。このとき籠の形が歪まないよう、両端を尖らせた力竹を、底の四隅を十字に結ぶように差し込む。次に細めの竹ひごを横に用いて籠に編み上げていく。このように網代底編み、箆目胴編み、縁仕上げが終わり、底の四隅に脚をつけ、さらに木の取っ手をつければ、本体ができ上がる。最後に粉末にしたダマールとフタバガキ油を混ぜ合わせ、それを全体に塗って乾かすと完成である。

## 乾燥フタバガキ林の生活必需品

タイ東北部にはコラート高原とよばれる緩い起伏の平原が広がる。かつては低みに天水田が拓かれ、高みは乾燥フタバガキ林に覆われていた。その林



つるべ籠(グラボム)  
太目(幅8ミリメートル)で平たい竹ひご12本を放射状に使い立竹とすることで、マコーク(*Spondias pinnata*)の実に似た丸底になっている

のなかにも天水田があり、雨季には稲が植えつけられる。開田過程で多くの木が残された天水田は、遠くから見ると林のように見えるので「産米林」とよばれる。産米林は大木のある大群や傾斜に応じたさまざまな畔で区切られている。

『東北タイの子』に「戻ろう。ふたつの水汲み籠を天秤棒で担ぎ、家路を急ぐカムコーン姉さんが歩きにくい畔を登ってもまったく水をこぼさないのを見て、小さなつるべ籠を手にもっているだけのクーンは「姉さん水運ぶのうまいなあ」と感心する。するとカムコーン姉さんはクーンにむかって、今日の出来事を誰にも話さないから偉いねと口止めを試みる。しかし帰宅して、高床の下で茅を編んでいた父親から今日の出来事を尋ねられると、クーン少年の口からは正直なことばが漏れてしまう。ひとの口をフタバガキ樹脂で封じることができない。

東北部では降水量が不足気味で、集水域も限られるので、雨頼みの稲作は不安定になる。乾季の飲み水は、井戸が頼りだ。軽くて丈夫な水汲み籠とつるべ籠は、乾燥フタバガキ林での生活に欠かせないバスケットリーであった。



# 中国の「周縁」を生きる

奈良 雅史 民博超域フィールド科学研究部

## じゃがいもと煙

「三姉妹——雲南の子」は昭通のじゃがいもと煙を思い起こさせる。二〇〇九年一月、わたしは雲南省北東部にある昭通を訪れた。街中では、油で揚げたものや石焼きにしたものなど、じゃがいもを使ったさまざまなスナックが売られていた。雲南の人びとのあいだで昭通といえば、じゃがいもだ。昭通は雲南省のなかでは気候が冷涼でじゃがいもの栽培に適しており、その一大産地であった。そして煙である。昭通の冬は寒く雪が降ることもあるほどだが、家屋に暖房設備がないことが多い。農村部では部屋で火を焚いて暖をとることが一般的だ。しかし、かなり煙たい。わたしはそれに耐えられず、寒さを忍せざるをえなかった。

本作では舞台が標高三二〇〇メートルの洗羊塘村であるということ以外は明らか

かにされない。ただし、その標高と劇中に登場する近隣の村落名から本作の舞台は昭通にある山村であることが推察される。雲南省は中国のなかでも経済的に貧しい地域であり、そのなかでも昭通は特に貧しい地域のひとつである。本作はそんな昭通のなかでも一段と貧しいとされる山村を舞台に暮らす幼い三姉妹の姿を描き出したドキュメンタリー映画だ。

洗羊塘村は強風が吹きすさぶ高地にあり、そこで暮らす八〇戸の人びとは土壁でできた簡素な家屋に暮らし、じゃがいもを育て、豚や羊を飼養することで生計を立てている。それは急速な経済発展を続ける中国の都市部の様相とは著しい対照をなす。そんな村で一〇歳の英英、六歳の珍珍、四歳の粉粉の三姉妹が、豚や羊、犬や猫とともに暮らしている。両親はいない。母は家を捨て、父は出稼ぎに出ている。村には祖父や伯母も暮らしているが、日常的には長女が洗濯をし、喧嘩をなだめたり、シラミをとったりと、妹たちの面倒を見ている。加えて、彼女は家畜の世話や畑仕事をおこない、その合間に宿題をこなし小学校に通う。

作中、長女の英英が馬糞や木の枝を使って火を焚く様子が何度か描かれる。それは濡れた靴を乾かすためであったり、じゃがいもに火を通すためであったりする。

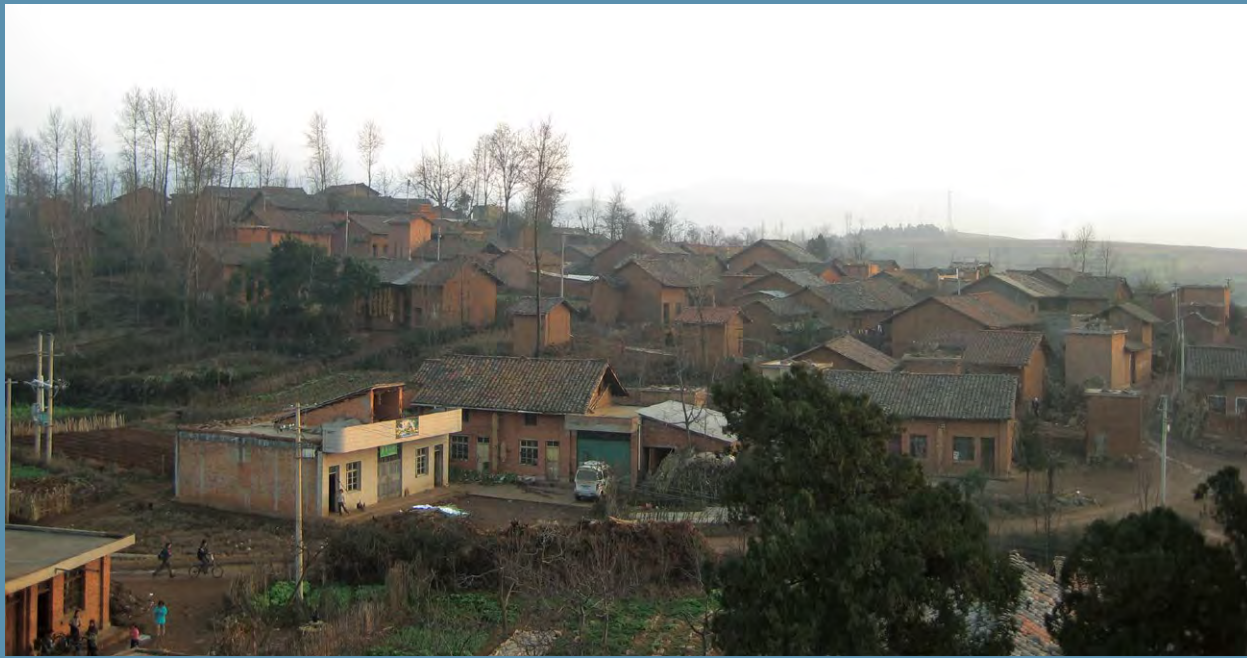
長女はいつも咳をしていた。家の内壁は煤け、三姉妹の衣服は煤と土ぼこりと垢で汚れている。家にはじゃがいもが山のように積まれており、彼女らは空腹になるとそれを焼いて食べる。

## 豊かさとは

本作は三姉妹の生活を淡々と追っていくなかで、その変化を描き出す。出稼ぎから帰って来た父は、経済的理由から長女だけを村に残し、娘二人を連れて再び出稼ぎに行く。しかし、それもうまくいかず、父は子守りの女性とその娘を連れて村へと帰って来る。こうして新たな同居人を迎えた三姉妹の生活が始まる。ここからは農村での貧しい生活とそこから抜け出すことのできない中国の農民たちを取り巻く過酷な現実が看取される。雲南省で有数の観光地として知られる麗江や大理といった少数民族を中心とした国や町が発展した地域からも、中華王朝の中心があった中原や近年経済成長が著しい沿岸部からも隔たった地域に位置する昭通の山村は、経済発展から取り残された「周縁」だ。

しかし、ときに子どもらしさを見せながらもその厳しい現実を生きる三姉妹の姿、特に唸りをあげる強風のなか長女が三女を抱えるように荒涼とした大地を歩

いていくラストシーンは憐憫以上のものを喚起する。さらに、あらたな「家族」を伴う父の帰還は、山村での生活が経済的な豊かさを望めえない過酷なものであるながらも、「他者」を受け入れる包摂性を備えたものである可能性を示唆しているようにも思える。「一人っ子政策」が続けられていた中国では、本作のタイトル「三姉妹」には単なる事実以上の含意があるだろう。本作では主役の三姉妹以外にも兄弟が登場する。それは国家から見放された「周縁」だからこそ可能になったことかもしれない。豊かに生きるとはどのようなことか。本作はそんな問いをわたしたちに投げかける。



レンガ造りの家屋が立ち並ぶ昭通農村部の風景



荒涼とした昭通農村部の冬景(写真はいずれも2009年に撮影)



昭通都市部の旧市街



# ギリシア文字を用いた アフリカの2つの言語

みやがわ そう  
宮川 創

国立国語研究所助教

ギリシア文字で書かれたアフリカの言語を知っているだろうか。ギリシアといえばヨーロッパの国であり、アフリカとは位置的にも離れているため、奇妙に思われるかもしれない。

紀元前4世紀、アレクサンドロス大王の東征によって、アフリカ大陸北東部の隅を占めるエジプトはペルシア人からギリシア人の手に渡った。大王の死後、エジプトは彼の将軍の1人であるプトレマイオスに始まるプトレマイオス王朝、次にローマ帝国、そして東ローマ帝国（ビザンツ帝国）によって支配された。その間、上流階級の言語はコイナーとよばれるギリシア語であった。それに対し、エジプトの民衆は、ヒエログリフなど古代エジプト文字で記録が残っている古代エジプト語の口語変種を喋っていた。この言語は、紀元前32世紀ごろから古代エジプト文字で書かれていたが、紀元前3世紀ごろからは、ギリシア文字に、いくつかの古代エジプト民衆文字を足した体系でこの口語が散発的に書かれた。紀元後3世紀ごろになると、その文字を使った綴り方が標準化されてきた。このなかには、エジプト多神教にまつわる文献、キリスト教の聖書や宗教書の翻訳、マニ教の聖典などの文書の翻訳、グノーシス主義やヘルメス主義といった思想書の翻訳などが含まれている。そのうち、一部の方言が共通語化し、キリスト教の布教とともに広まった。当時のエジプト人自身は、この言語を単にエジプト語とよんだ。しかし、7世紀にイスラームがアラビア半島で勃興し、エジプトを支配するようになると、アラブ人は、エジプトのキリスト教徒たちをキプト (qibt) とよんだ。

これが、西洋の諸言語に入って英語ではコプト (Copt) となり、これが日本語に入った。「コプト」はそれ自体が「エジプト」と同源の単語である。しかし、コプトの人びとが当時は日常で用い、現在でもコプト正教会の典礼などで用いられているエジプト語は、特別にコプト語とよばれている。そして、ギリシア文字に民衆文字を加えてコプト語をしるすために工夫して用いた文字体系はコプト文字とよばれている。

ギリシア文字を工夫して用いたコプト語と同じように、コプト文字を工夫して用いた言語に、古ヌビア語がある。古ヌビア語は、エジプト最南部・スーダン北部のヌビア地方に5世紀ごろから15世紀ごろに存在した中世ヌビア諸王国で書かれた。ヌビア地方には、古代にはクシュ王国、そしてメロエ王国が存在していた。メロエ王国では、古代エジプト文字から影響を受けたメロエ文字が用いられた。中世のヌビア人たちは古ヌビア語を書きしるすためにコプト文字に3種類のメロエ文字を加えたヌビア文字を用いた。

ギリシア語はインド・ヨーロッパ語族に、古ヌビア語はナイル・サハラ語族に、コプト語はアフロ・アジア語族に属する。しかし、これらの言語は、歴史的な経緯からギリシア文字を用い、あらかせぬ音は、その地域で元々使われていた文字体系から追加した。新しく入ってきた文字体系を古い文字体系で補ったエジプト人、ヌビア人の工夫は、ナイル川流域の文字の、北から南への伝播を考えるうえで興味深い。



『月刊みんぱく』は  
国立民族学博物館の広報誌です。

世界の文化とみんぱくの展示、研究者の活動について紹介しています。本誌は定期購読が可能です。また、友の会会員の方には毎月お届けします。

国立民族学博物館友の会

みんぱくの活動を支援し、積極的に活用するために作られました。本誌購読のほかにも、各種催しなど、さまざまなサービスがあります。

定期購読、友の会については国立民族学博物館友の会(千里文化財団)までお問い合わせください。

電話 06-6877-8893 (平日9:00~17:00)

https://www.senri-f.or.jp/minpaku\_associates/

月刊みんぱく 2022年7月号

第46巻第7号通巻第538号 2022年7月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館  
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1  
電話 06-6876-2151

発行人 園田直子

編集委員 三島禎子(編集長) 池谷和信 上羽陽子

岡田恵美 中川理 吉岡乾

制作・協力 公益財団法人 千里文化財団

印刷 能登印刷株式会社

\*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報・IR係をお願いします。

\*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

この雑誌は、環境に配慮した工場で、再生産可能な大豆油由来のインク、FSC®認証材および管理原材料から作られています。また、読みやすくするために、色づかいやレイアウトなどに配慮しています。



月刊みんぱく

2022年

7月号

編集後記

夏が来たら鮎<sup>あゆ</sup>を楽しみにする人は多い。わたしはもっぱら食べる方だが、釣り好きは全国の河川を行脚する。カワウにとっても鮎はごちそうのひとつなのだろうが、人間が横取りする鵜飼ではカワウが哀れだと思っていた。しかし、本号の特集では、人間と鵜のかかわりが実益だけでなく、信仰や美術にもおよんでいること、さらに上手につきあってゆくためには駆除も必要であることなど、多様な側面を知ることができた。知ることはともに生きるための第一歩であることは、人間社会で異文化を尊重する姿勢とまったく同じである。

さて、今月号で「世界のバスケットリー × バスケットリーの世界」コーナーが最終回になる。これまで、植物を編み組みし、いわゆるカゴなどの器だけではない多様な用途で利用されるバスケットリーの数々を紹介してきた。

次号からは新しいコーナーとして「コレクションあれこれ」が始まる。民博所蔵の標本資料や映像・音響資料、文字資料などからコレクションとして整備されたデータベースについて、みんぱくとの関係やそれにまつわる逸話などを紹介してゆく。乞うご期待。(三島禎子)

次号の予告 8月号

特集「世界に広がる  
ヒップホップ・カルチャー」(仮)

国立民族学博物館  
National Museum of Ethnology

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1 電話 06-6876-2151

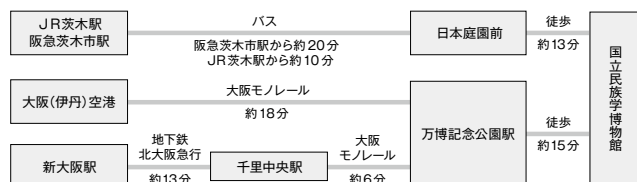
開館時間 10:00~17:00(入館は16:30まで)

休館日 毎週水曜日(水曜日が祝日の場合は翌日が休館日)  
年末年始(12月28日~1月4日)



主要ターミナルからのアクセス

本館までの交通手段は次の方法が便利です。



みんぱくホームページ

https://www.minpaku.ac.jp/

